

2006年度前期授業評価（SE・TE）の概要報告

基礎ゼミナール

都市教養学部理工学系・助教授

青塚 正志

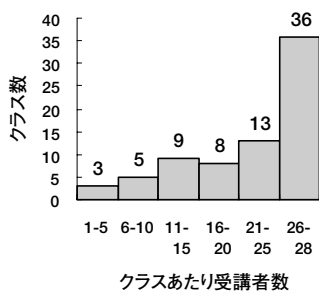
昨年度からの改善点

首都大学東京の新規科目である「基礎ゼミナール」の2年目が終了した。開講初年度の昨年度には、担当教員から多くの問題点について指摘を受け、また「基礎教育に関するアンケート調査」と「全学共通科目に関するアンケート調査」では受講生からの多くの不満の声が寄せられた。昨年度基礎ゼミナール部会ではこれらに基づいて、基礎ゼミナール実施上の問題点を絞り込み、改善策を検討した。詳細についてはFDレポート第3号を参照していただくことにし、主な改善点を簡単に紹介する。

《改善点1》 学生がクラス選択する際の自由度を高めるために、開講時間割枠およびクラス数の増を行った。

初年度（H17年）の、月曜、火曜、金曜 5時限の時間割枠に加えて、水曜日4時限枠でも開講することにした。総開講クラス数もH17年度74クラスから77クラスへ3クラス増になった。

H17年度基礎ゼミナール
受講者数/クラスの分布



《改善点2》 クラスあたりの受講者数を可能な限り均等化する方向でのクラス決定方式を採用した。

H17年度は、なるべく学生の希望を叶えることを基本に、28名をクラス受講生の上限に設定し、その一方で、下限を設定せず、数名であっても第一希望の学生がいればその人数で開講することにした（上図）。その結果、受講者数が多すぎる、あるいは少なすぎて、ゼミナールが成立しなかったとの多くの不満が寄せられた。

本年度は、上限を本年度の28名から24名に引き下げ、さらに極端に受講生の少ないクラスを作らない方式でクラス決定を行った。その結果、当然であるが、第一回目のWeb抽選に漏れる学生数が増加することになった。



第一回抽選（第1希望から第5希望までのクラスを申請）に漏れた学生割合は、H17年度は5.1%、本年度は13.2%であった。本年度のクラスあたりの受講者数分布は左図のようになった。

《改善点3》

本年度の担当教員へ「基礎ゼミナール担当の手引き」を配布した。

昨年度は開講初年度ということもあり、基礎ゼミナールの趣旨・目的が担当教員に必ずしも浸透しないまま実施されてしまい、そのために受講生から、教員の取り組み姿勢等についての不満が噴出した。基礎ゼミナール部会では、その改善のために、本年度担当教員に「手引き」を作成、配布し、基礎ゼミの趣旨・目的の再確認をお願いした。また「手引き」には、昨年度の担当教員から寄せられた工夫、反省を盛り込み、事前の授業計画策定に活用していただくことを期待した。

基礎ゼミナール授業評価（SE）結果（1）

本年度は、昨年度に引き続き行われた「全学共通科目に関するアンケート調査」に加えて、昨年度には実施されなかった「基礎ゼミナール個別」のSE、TEが実施され、基礎ゼミナール部会では本科目の評価についてより詳細な情報を得ることができた。

「全学共通科目に関する学生へのアンケート調査」では、「基礎ゼミナールの授業によって大学生としての基本的な学習力が身についたか？」の問いに、「強くそう思う（評価5）」から「まったくそう思わない（評価1）」

の5段階で回答する項目が用意された。この設問によって、基礎ゼミナール学生評価の経年比較が可能である。評価平均値は、H17年度が2.17、H18年度が3.19であった。初年度に比べて、受講生の基礎ゼミナールで得られたものへの実感が増したように思われる。

基礎ゼミナール個別授業評価の「私は本ゼミナールを受講して満足した」の設問に対しては3.66と、同時に実施された他基礎教育科目個別評価での同設問への回答と比較しても高い評価となった（下図）。

全学共通科目に対するアンケート調査

設問：基礎ゼミナールの授業によって大学生としての基本的な学習力が身についたか？

	5	4	3	2	1
H17年度	6.7	20.4	29.5	23.0	19.7
H18年度	12.0	27.2	36.0	16.8	7.7

基礎ゼミナール個別授業評価

設問：私は本ゼミナールを受講して満足した

H18年度	29.2	30.7	23.4	10.2	6.5
-------	------	------	------	------	-----

（グラフの数字は各評価段階）

基礎ゼミナール部会は、本年度の受講者数均一化を優先したクラス決定方針により、希望クラスに入ることのできなかつた学生の増加が全体的な満足度を低下させてしまうのでは、と危惧していた。しかし、アンケート調査結果からは、その影響は最小限であったように思われる。担当教員の努力によって、第一希望クラスでの受講ではない学生の多くが、そのテーマに興味を持ち、最終的にはある程度の満足感を得たものと思われる。これにより、基礎ゼミナール部会では、本年度のクラス決定方式が、ある程度の成果をもたらしたと評価し、次年度においても採用することにした。

基礎ゼミナール授業評価（SE）結果（2）

基礎ゼミナール個別評価の自由記述欄に記された、学生からの意見、要望、感想（総数407件）について、意見内容と、記入した学生の満足度との対応が可能であることから、受講生が基礎ゼミナールのどのような点が不満だったのか、あるいはどのようなところに満足したのかを探ることにした。特に、批判的意見については、そ

れらを述べた学生が「受講して満足したか」の設問に対して5段階のうち1～3で回答した「非満足群」と、4、5で回答した「満足群」に分けて分析することにした。

(a) 18年度SE自由記述から、主な批判的意見

（非満足群数：満足群数）

内容に関するもの（44名：11名）

- ・教員のやる気が無い。
- ・もう少し計画性のあるゼミを。
- ・何を調査すればよいのか不明確。
- ・討論など一回も行っていない。
- ・意見交換を期待していたが、その機会が無かった。
- ・趣旨が達成されていない。

クラス決定に関するもの（8名：17名）

- ・クラス決定の締め切りが早すぎる。
- ・希望するゼミに入りたかった。
- ・選択のための情報不足。
- ・人気の無い授業は改めるべき。

時間割配置に関するもの（4名：19名）

- ・専門科目、教職科目とバッティングする。
- ・水曜日以外も4時限に配置して欲しい
- ・前期だけでは物足りない。

この集計から、学生の低い満足度がゼミナールの内容や、教員の取り組み方への不満と直結していることが明白である。初年度に比べて全体的な評価では向上が見られたものの（評価結果(1)参照）、担当教員には、ゼミナール実施法について、さらに努力・工夫をお願いしたい。

(b) 18年度SE自由記述から、主な好意的意見

- ・課題発見、問題解決の重要性を認識（29名）
- ・発表、プレゼン技法の修得（27名）
- ・多様な価値観、人間関係の重要性の認識（37名）
- ・知識が得られた（20名）
- ・担当教員が良かった（11名）
- ・その他（楽しかった、達成感があった）など（17名）

これらの好意的意見（非満足群、満足群を問わず集計した）は、基礎ゼミナールの趣旨・目的の重要性を学生が認識し、それらが達成できたことによる満足感を反映したものと判断される。特に、異なる学部・系に所属する学生が集う場だからこそ「多様な価値観を認識でき」、それを基盤にした「人間関係の重要性が認識できた」、ことについての満足感が最も多く寄せられたが、これは他科目では実感し難い、基礎ゼミナールならではのもの

であろう。

現在、基礎ゼミナールは全学共通の必修科目として提供しているが、基礎ゼミナールに準じた科目を各コースのカリキュラム内で用意し、その分野での基礎的知識を概説しながら、学生に課題発見や問題解決の重要性を認識させる、ことでも良いのでは、という意見を耳にする。それによって、担当者決定、時間割配置、クラス決定などの手続きは極めて簡略化されるだろう。しかし、基礎ゼミナールと一体となって科目を構成している「都市文明講座」の開講についての対応が問題となる。また、自コースの学生を対象に行うゼミナールという安易さから、ゼミナール形式から離れて、もっぱら基礎知識を解説することに重点が移ってしまい、他専門科目と変わりがなくなるという危険性もある。なによりも、基礎ゼミナールを各コースに「格納」してしまった場合には、今回のSE評価自由記述欄で最も多い好意的意見であった「多様な価値観の認識」の機会が激減することになるだろう。今回の基礎ゼミナールSEから、現行方式での基礎ゼミナールの意義が学生からも歓迎されていることを読み取ることができ、次年度以降の基礎ゼミナール部会、担当教員がさらに充実した基礎ゼミナールの提供に努めていくことの重要性を認識した。

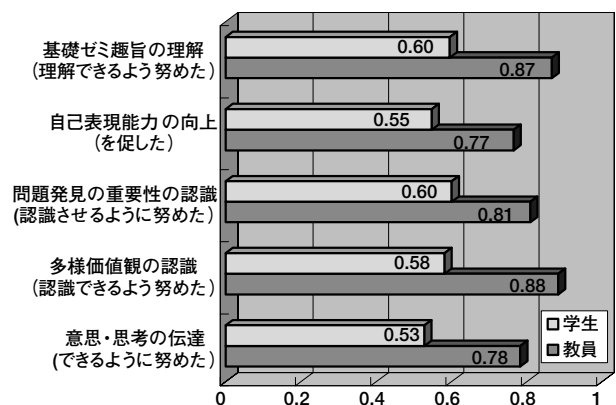
基礎ゼミナールの趣旨・目的の達成に直結した満足感に次いで、「知識が得られて良かった」という好意的意見も多くあった。これは、基礎ゼミナールの今後の実施にあたり、重要な示唆を含む。基礎ゼミナールで中心となるテーマは、担当教員の専門分野からのものになるのは当然としても、特定分野の知識を教授することは、本科目の趣旨・目的の一義なものではない。しかし一方で、今回のSEの結果から、知識（多くの受講生にとって「異分野」のものであろうと想像されるが）を得たという満足感が伝わってくる。ここから、我々が銘記すべきことは、趣旨・目的、あるいは実施形態の違いを問わず、どのような講義にも共通して学生の知識欲を満たすことが不可欠、ということである。基礎ゼミナールとしてその例外ではあり得ない。

基礎ゼミナールにおいて、討論、共同調査、発表が、アカデミックな裏づけなく行われるのでは、受講生は満足しないだろうし、討論、調査するために基礎知識の解説を重視しすぎると討論、共同作業などの時間が削られてしまい、基礎ゼミナール本来の趣旨・目的が達成されない。基礎ゼミナールを担当している多くの教員がこの難しさに直面しているものと思うが、討論、調査などの受講生の共同作業部分と、受講生の知識欲を満足させるための基礎知識の解説部分の良好なバランスにいつそう心がけていただきたいと思う。

基礎ゼミナール授業評価(SE, TE)結果から、担当教員と受講生の評価比較

基礎ゼミナール個別授業評価では、受講生と教員に互いに対になる形での設問を設定し、担当教員の自分自身の取り組みへの評価と、学生の評価との関連を探ってみた。例えば、担当教員向けには「受講生に対して、基礎ゼミナールの趣旨が理解できるように努めたか?」を問い、学生向けには「基礎ゼミの趣旨を理解できたか?」を問う、といったやり方である。

下のグラフは、そのような5つの設問について、「強くそう思う(評価5)」、「そう思う(評価4)」と解答した割合である。設問は、上が学生向け、下の()付が教員向けである。すべての設問について、担当教員の評価と受講生の評価にはかなりの差があり、その方向は教員>受講生と一致している。この結果は、担当教員がそれぞれの項目について自身を努力したと評価しているわりには、それがいまひとつ功を奏していないことを示しているように思われる。学習意欲、受講姿勢が必ずしも良好でない学生が皆無ではないだろうから、評価が「教員=受講生」とはなり得ないが、教員は自分の熱意が学生に伝わるようさらに努力する必要があるだろう。担当教員には、ゼミナールの中で、自らの熱意、努力が学生に伝わっているか否かを的確に判断する客観性と、それが良好ではないと判断された場合にはゼミナールの実施方法、指導方法などをリアルタイムで改善するという臨機応変さが必要であろう。



受講生の評価を別にすれば、TEの結果は、全体的に教員が基礎ゼミナールの趣旨・目的を理解し、その達成に熱意を持って担当している、と評価することができるかもしれない。しかし、あえて見方を変えて、やや厳しい意見を述べさせていただく。

本来は、これらの設問項目について、担当教員の100%近くが「強くそう思う」「そう思う」でなければ

ならないのでは？と思う。TE結果を額面どおりに受け取れば、受講生は、基礎ゼミナールの趣旨・目的を完全には理解していない20%弱の担当教員によるゼミナールの受講を余儀なくされていることになる。本年度開講した77クラスのうち15クラス、およそ300名の学生が、自分の担当について趣旨・意義や、その達成のために何をなさなければいけないかが不明瞭なままの教員による基礎ゼミナールを受講したことになる。これは看過してはいけない数のように思われる。

次年度は基礎ゼミナール開講3年目になる。開講当時の戸惑いや混乱を経て、学生、教員双方に本科目の意義が浸透し始めているように思う。時間割配置、開講クラス数、クラス決定方式も安定した段階に入り、また、基礎教育センター教務課他関連部局のご努力によって、PC貸し出しシステム、資料コピー法、TA雇用方式などのシステム、設備面も整備されつつある。従って、今後の基礎ゼミナールの趣旨・目的の達成には、よりいっそ

う担当教員の姿勢、力量の向上が要求されていくと思われる。報告の最後に、第3回FDセミナーで使用したスライド1枚を添付する。

本報告が、今後基礎ゼミナールをご担当の教員各位にとって何がしかの示唆になれば幸いです。

今後の基礎ゼミナール改善のために

時間割配置，クラス数とクラス受講者数，
クラス決定法などの改善検討，
設備・機器類の整備

これらは受講生の満足度をあげるために重要ですが、限度があります。

担当教員のいっそうの意識と技量の向上が伴わなければ、真に満足度の高い授業とはなりません。

「来年はうまくやろう」「他講義と違ってやり難い」「初めてだから仕方が無い」とお思いでしょうか、

学生にとっては一回きりの授業です！
次年度のご担当が決定しましたら、入念な準備を(担当者への手引きを活用)お願いしたいと思います。